論　文

増加するバングラデシュからの女性家事労働者
—出国前研修生へのアンケートから見える女性海外出稼ぎ労働者の姿—

須田　敏彦（大東文化大学国際関係学部）

Increasing Female Domestic Workers from Bangladesh -A Survey on the Features of Female Overseas Workers in Pre-departure Training-

Toshihiko SUDA

1. はじめに

経済のグローバル化と交通・通信手段の発達の中で、労働市場のグローバル化が進んでいる。バングラデシュは1990年代に入って男性の労働力を活発に輸出するようになり、現在世界有数の労働力の送出国となっている。そのバングラデシュで、2000年代に入ってから、女性の雇用目的での出国者（以下、「海外出稼ぎ者」とする）が急増している。政府統計（BMET n.d.a）によると、バングラデシュからの女性の海外出稼ぎ者の年間出国者は2000年には454人に過ぎなかった。それが、2015年には10万を突破し、2017年には12万1925人を記録した。その後政府が抑制政策に転じたことから現在足踏み状態であるが、それでも年間10万人台を維持している[1)]。海外出稼ぎ者全体に占める女性の割合も、2000年には0.2％とほぼ無視できる程度であったが、2015年には18.7％に達した（後掲の図1）。

彼女たちの行き先はほとんどが中東で[2)]、家事使用人としての就労が主な目的である。イスラム教徒（ムスリム）が人口のほぼ9割を占めるバングラデシュでは、女性が自分の家や集落の外で、家族以外の人、特に男性の視線に晒されて働くことへの抵抗感が強かった。それが、現在では毎年10万人を超える女性が就労のため海外に出国するという、これまで考えられなかった状況が生まれているのである。

バングラデシュの女性海外出稼ぎ者はどのような背景をもった人なのだろうか。また近年急増しているのはなぜだろうか。本稿は、家事使用人として出稼ぎにいく女性に課される出国前研修を受けている女性に対して行ったアンケート調査に主によりながら、これらの問いに対する答えを出そうとする試みである。

本稿の構成は以下の通りである。次節において、バングラデシュにおける女性の海外出稼ぎ者の増加と地域性を、主に統計データにより確認する。そして、主に既存の文献によりながら、増加の

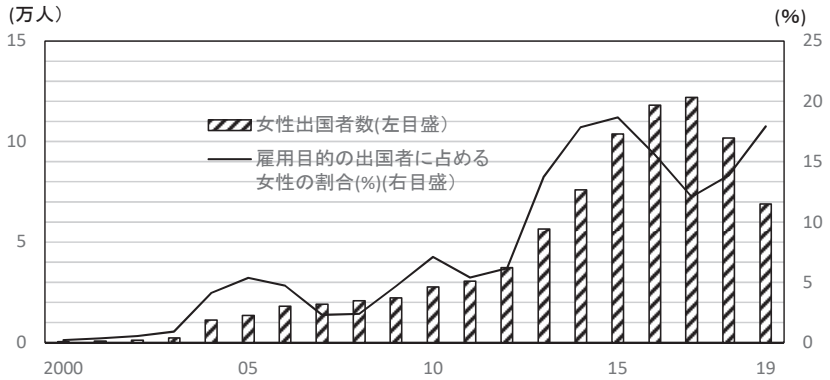
背景を国内および国際的視点から検討する。次に、本稿の中心となる第 3 節では、主に出国前研修を受けている女性海外出稼ぎ予定者に行ったアンケート調査から、女性海外出稼ぎ者の社会経済的特徴や出稼ぎの目的、出稼ぎの決定に至った経緯、出国を前にした気持ちや帰国後の計画などを明らかにする。最終節の第 4 節は、まとめと結論である。

第 2 節　バングラデシュの女性海外出稼ぎ者の増加の背景と地域性

(1) 女性海外出稼ぎ者増加の背景

①女性海外出稼ぎ者増加の政策的要因

すでに見たように、バングラデシュにおける女性の海外出稼ぎは、2000 年代に入って急増した。それとともに、海外出稼ぎ者全体に占める女性の割合が高まり、近年では、海外出稼ぎのための出国者の 1 ～ 2 割が女性となっている（図 1）。



出所：BMET（n.d.a)から筆者作成。
注：2019年の数字は、1月から7月までのデータ。

図 1　雇用目的の年間女性出国者数の推移

このように今世紀に入って女性の海外出稼ぎ者が増えた背景の一つには、政府による政策の変化がある。Sultana and Fatima（2017）によると、女性の海外出稼ぎは 2000 年ごろまで医師や看護師、教師など専門職がほとんどで、半熟練および未熟練の労働者の海外出稼ぎは意図的に制限されていた。それが、2003 年になると半熟練、未熟練の労働者であっても 35 歳以上ならば女性も海外に出稼ぎに出られるようになった。そのため、主に中東産油国で家事労働に携わる女性の海外出稼ぎ者がその後急増した。2006 年には年齢制限はさらに緩和され、25 歳以上ならば出稼ぎに出られるようになった。海外出稼ぎがもたらす莫大な送金と雇用創出を国の経済発展に資する重要な要因として認識するようになったバングラデシュ政府の政策転換によって、未熟練女性の海外出稼ぎもバングラデシュの経済発展の重要な担い手となったのである。これを受け、2011 年には各県にある政府の技

術訓練学校で、家事労働を目的として海外に出稼ぎにでる女性の研修が行われるようになった[3)]。

女性の海外出稼ぎを奨励するように方針を転換したのは、政府だけではない。バングラデシュ最大の NGO で、主に農村部で社会経済の発展のために活動し大きな影響力をもつ BRAC も、海外出稼ぎを国の社会経済の発展や貧困解決のために役立つものとして肯定的に位置づけるようになり、2006 年から安全な海外出稼ぎを促進するためのプログラム（Migration Programme）を開始した。そして、その対象を女性の海外出稼ぎ者に広げた（BRAC 2012）。

このように、2000 年代に入ると、政府、そして大きな影響力を持つ NGO が女性の海外出稼ぎを肯定的に捉え、促進策や支援策をとるようになった。それが、それまでほとんどなかった女性の海外出稼ぎ、特に家事労働者を中心とした未熟練の女性労働者の出稼ぎが急増した大きな要因の一つであったと考えられる

②バングラデシュの女性労働環境の変化

女性の海外出稼ぎに影響を与えた国内の環境変化として、女性が家庭の外で働くことに対する社会的抵抗感の低下、そして女性が働いて所得を得る必要性の増大があげられよう。前者として重要なのは、1990 年代に入ってバングラデシュで輸出志向型のガーメント産業が急拡大したことにより、縫製工場などで働く女性が急増したことである。現在バングラデシュは世界第 2 位の衣類の輸出国であり、縫製工場で働く 400 万人を超える工員の 8 割以上が女性であるという（Islam 2017）。女性は家庭の中で家事労働に従事する、あるいは屋敷地の中で収穫後の農産物の脱穀作業や家畜の飼育などに携わるという伝統的な労働から（西川 2001、ガードナー 2002、吉野 2013）、男性に混じって都会の工場で働く労働へと女性の労働の形が変わってきている。

そして、後者の環境変化として、女性が家庭の外で働いて賃金を得、家庭の所得向上に直接貢献することへの期待が家庭の中で高まっていることが挙げられる。須田（2019）は、バングラデシュコミラ県の農村に住む中学生（14 ～ 15 歳程度）を対象としたアンケート調査で、若者の中学校卒業後の進路希望や女性が家庭の外で働くことに対する意識などを調べた。それによると、男女ともに、8 割程度の生徒が、女性が家庭の外で働くことを肯定的にとらえていた。そしてその主な理由は、女性が働いて所得を得ることで家庭が豊かになり子供の教育などに貢献できるというものである。女性が家庭の外で働くことは禁止されるべきことではなく、家族が望ましい生活を送る上で必要なことだと広く考えられるようになっているのである。このように、積極的に家庭の外で働く機会を探し、家庭に経済的貢献をすることが女性にも求められるようになったことが、女性の海外出稼ぎを後押しすることにつながったのではないだろうか。

さらに、女性が中東に出稼ぎに出る以前からバングラデシュ国内で家事使用人として他人の家で働くことがごく一般化していること、また、すでに家事労働を目的としてインドなどへ女性が働きに出ていることも無視できない。バングラデシュやインドでは、豊かな家庭が貧しい家庭の女性や女児を、住み込みまたは通いの家事労働者として雇うことはごく一般的である。少し古いデータだが（2006 年）、バングラデシュでは都市で家事使用人として働く 18 歳未満の子供が 42 万人おり、

その 78％は女の子だという（日下部 2018, p.84）。農村部でも、貧しい女性がわずかなお金やコメなどと引き換えに比較的豊かな家の家事を手伝っている。そして、こうした女性家事使用人の中には、バングラデシュからインドに非合法に働きに出る人もいる。その出稼ぎの範囲は、バングラデシュに隣接し大都市コルカタを擁する西ベンガル州だけでなく、デリーやムンバイ、グジャラート州、パンジャーブ州などバングラデシュから遠く離れた地域にまで及ぶという（Siddiqui　2006）。このように、国境を超えた女性家事労働者の移動がすでに存在していたことも、中東への出稼ぎが急速に増加した要因ではないだろうか。

③中東の家事労働者市場をめぐる国際的な要因

こうしたバングラデシュ国内の要因に加えて、国際的な環境変化も重要な要因であると考えらえる。バングラデシュからの女性海外出稼ぎ者の多くはサウジアラビア、UAE、クウェート、カタール、レバノンなど中東諸国で家事使用人として働いている。これらの国では莫大な石油収入の恩恵などから国民は豊かな生活をしている。湾岸アラブ諸国の都市の一般家庭のほとんどが家事使用人を雇っており（辻上 2014, p. 101）、家事労働者の代表的な国籍は、インド、インドネシア、エチオピア、スリランカ、フィリピンであるという（石井 2014, p. 127）。

バングラデシュで女性の海外出国前研修を行っている技術訓練学校でのヒアリングによれば[4]、中東諸国の家事労働市場において、インドネシア、フィリピン、スリランカなどからの家事労働者が減少しており、それがバングラデシュ人家事労働者の需要増大につながっているという。実際、スリランカの雇用目的の女性海外出国者数は、1995 年から 2014 年の間は年間 10 ～ 14 万人いたが、2017 年には 7.3 万人へと減少している[5]（Sri Lanka Bureau of Foreign Employment 2017）。女性の海外出稼ぎを長く奨励してきたスリランカは、長期間の出稼ぎが生む家庭や社会への悪い影響などから、近年女性の海外出稼ぎを抑制する方向に政策を転換しており（須田 2013）、それが女性の海外出稼ぎ者の減少につながっていると考えられる。

また、家事労働者の主要な送出国における経済発展と賃金の上昇も中東諸国における家事労働者市場の構造変化を生んでいる可能性がある。フィリピンやインドネシア、スリランカでは経済発展によって賃金水準が上昇し[6]、それに伴って出身国ごとに決められる中東での家事労働者の賃金も上昇している。フィリピンは 2006 年、湾岸アラブ諸国で働く自国出身者の最低賃金を 400 ドルに引き上げた（石井 2014, p. 128）。サウジアラビアで働くスリランカ人家事労働者の最低賃金も現在は 1125 サウジリヤル（2019 年 8 月のレートでおよそ 3 万 200 円）であり[7]、バングラデシュ人の 800 リヤル（同、2 万 1250 円）[8] よりも 5 割ほど高い。このように、バングラデシュ人家事労働者の賃金が他の主要な家事労働者送出国に比べてかなり低いことからも、バングラデシュ人女性に対する需要が伸びているのではないだろうか。

(2) 海外出稼ぎ者の地域性

バングラデシュの海外出稼ぎ者の出身者には、明確な地域的偏りが見られるので、次節でアン

ケートの分析をする前に、女性海外出稼ぎ者の地域的特性を確認しておきたい。表１は海外出稼ぎ者（雇用目的の出国者）の出身地別出国者数を見たものである。これから分かるように、海外出稼ぎ者のほぼ９割を占める男性の海外出稼ぎ者は絶対数で見ても人口（世帯数比）比でみてもバングラデシュ南東部のチッタゴン管区が最も多い。

表１　海外出稼ぎ者（雇用目的の出国者）の地域特性（2005 ～ 2018 年）

（世帯、人、％）

管区・県		世帯数(2011年)	海外出稼ぎ者累計(2005～2018)	男性	女性	出稼ぎ者に占める女性の割合（％）	世帯数に対する男性出稼ぎ者累計の比率（％）	世帯数に対する女性出稼ぎ者の累計の比率（％）
チッタゴン管区	ブラモンバリア県	538,937	438,031	406,910	31,121	7.1	75.5	5.8
	コミラ県	1,053,572	873,330	848,652	24,678	2.8	80.5	2.3
	チャンドプール県	506,521	332,906	322,514	10,392	3.1	63.7	2.1
	フェニ県	277,665	212,523	210,587	1,936	0.9	75.8	0.7
	ノアカリ県	593,918	318,302	312,150	6,152	1.9	52.6	1.0
	ラクシミプール県	365,339	199,708	195,445	4,263	2.1	53.5	1.2
	チッタゴン県	1,532,014	680,648	672,774	7,874	1.2	43.9	0.5
	コックスバザール県	415,954	98,822	95,257	3,565	3.6	22.9	0.9
	バンドルバン県	80,102	3,758	3,147	611	16.3	3.9	0.8
	カグラチョリ県	133,792	7,807	6,938	869	11.1	5.2	0.6
	ランガマティ県	128,496	4,481	3,953	528	11.8	3.1	0.4
チッタゴン管区		5,626,310	3,170,316	3,078,327	91,989	3.0	54.7	1.6
ダカ管区		10,849,315	2,821,409	2,395,250	426,159	17.8	22.1	3.9
シレット管区		1,790,892	611,291	535,532	75,759	14.1	29.9	4.2
ボリシャル管区		1,862,841	287,908	237,496	50,412	21.2	12.7	2.7
クルナ管区		3,739,779	539,102	479,633	59,469	12.4	12.8	1.6
ラッシャヒ管区		4,486,829	499,655	461,002	38,653	8.4	10.3	0.9
ロングプール管区		3,817,664	189,656	163,268	26,388	16.2	4.3	0.7
合計		32,173,630	8,119,337	7,350,508	768,829	9.4	22.8	2.4

出所：BMET（n.d.b）等から作成

注：雇用目的のため一人で複数回出国した人、また一世帯から複数人が出国している場合があるので、世帯数に対する出稼ぎ者累計の比率は、海外出稼ぎ者あるいはその経験者がいる世帯の割合を示すものではない。

しかし、女性の海外出稼ぎ者を見ると状況は大きく異なる。女性の累積海外出稼ぎ者の半数以上（55.4％）を占め、世帯数比でもシレット管区に続いて高いのが首都ダカ市を中心としたダカ管区である。ダカ管区には女性の働き場所であるガーメント産業の工場が集中している。ガーメント工場で働いたり家事使用人として働く貧しい女性も多い。それが、後で検討するように、女性海外出稼ぎ者の多いことと関係しているのではないだろうか。

一方男性の海外出稼ぎ者が最も多いチッタゴン管区は、人口（世帯数）が多いため女性海外出稼ぎ者の数としてはダカ管区に続く２位であるが、世帯数比としては、全国の中でも低い水準である。この地域はイスラム教の中でもワッハーブ派とよばれる原理主義的な宗派の影響が強く、それが女性の海外出稼ぎを抑制している可能性がある。女性の海外出稼ぎが少ない傾向はチッタゴン管区の中でもチッタゴン県を中心とする南東部で最も強く、北部のブラモンバリア県とコミラ県、チャンドプール県では、相対的に弱い傾向が見られる。本稿で現地調査の対象としたコミラ県は、世帯数比で見た場合、男性の海外出稼ぎはきわめて盛んで全国１位だが女性の海外出稼ぎは全国平均とほぼ同じ水準である。この差に、宗教的影響がうかがわれる。

ただ、以上チッタゴン管区について述べたのは、バングラデシュの人口の圧倒的多数を占めベンガル語を母語とするアーリア系のベンガル人が大多数を占める地域である。チッタゴン管区には、チベット・ビルマ語系の言葉を母語とし仏教徒やキリスト教徒が多いモンゴロイド系の少数民族（チャクマ、マルマ、モンなど）が住むチッタゴン丘陵地帯が含まれている。チッタゴン丘陵地帯を構成するバンドルバン県、カグラチョリ県、ランガマティ県は、海外出稼ぎにおいてチッタゴン管区でも他県とは大きく傾向が異なり、バングラデシュ北部のロングプール管区と並び、バングラデシュの中では男女共に海外出稼ぎが非常に少ない地域となっている。

第 3 節　女性海外出稼ぎ者の姿―出国前研修生へのアンケート調査の結果

（1）調査の目的と方法

以上、バングラデシュで女性の海外出稼ぎ者が増えていることを確認し、その背景や地域性を探った。ここでは、女性海外出稼ぎ者の多数を占めていると考えられる家事労働者の①社会・経済的な特徴、②出稼ぎの目的と出稼ぎを決心した経緯、③出稼ぎに対する意識、④出稼ぎから帰国した後の計画や期待を、中東諸国および香港で家事使用人として働くため出国前研修を受けている女性たちを対象としたアンケート調査によって明らかにする。調査は、バングラデシュ南東部のコミラ県ショドル郡（Sadar Upazila）にある政府の技術訓練学校（Technical Training Centre：TTC）[9] において、2019 年の 3 月と 7 月に行われた。回答者は、中東出稼ぎ予定の研修生が 119 人、香港出稼ぎ予定の研修生が 35 人である。

調査は、TTC の協力を得て研修中の女性たちに質問票を配布し、調査員（バングラデシュ人）が質問の内容や記入方法を説明した上で、自分で回答を記入してもらう方法を取った。しかし、特に中東研修生の中には質問の内容をよく理解できない人や非識字者が多く、回答者同士で質問の内容を教え合ったり、文字を書ける人が書けない人の代わりに本人から聞いて記入したりすることも多かった。また、TTC の職員や調査員、そして筆者自身が研修生に調査票の内容を口頭で質問しその答えを記入する場合が多くあった。したがって、質問の内容はほぼ同じだが [10]、調査の方法は回答者によって若干異なることになる。

（2）家事労働目的の出稼ぎの手続きと出稼ぎ先による条件の相違点

アンケートの具体的な分析をする前に、家事労働目的の出稼ぎの手続きの手順と、出稼ぎ先による給料や渡航費用、募集条件などの相違点について、簡潔に整理する。

中東の現地での家事労働者に対する需要は、中東各国にある人材斡旋業者に寄せられ、その募集情報がバングラデシュの人材募集業者（recruiting agency）に提供される [11]。バングラデシュの募集業者は、中東諸国の斡旋業者から送られる募集情報を見ながら自分のネットワークを使って募集条件に合う女性を集める。応募した女性は業者の指示に従って所定の健康診断を受けたりパスポートを取得するなど、渡航の手続きを進める。それが済むと、それぞれの出稼ぎ希望の女性は所定の研修を全国にある研修機関で受け、そこで合格と認められると出稼ぎに行くことができる、という

流れである。本調査が行われたコミラ TTC は、その研修機関の一つである。

本調査が対象とした香港への出稼ぎ者の人材調達の方法は中東への出稼ぎと若干異なる。香港にある人材派遣会社がバングラデシュ政府と提携し、香港で家事使用人として働くバングラデシュ人女性を募集し自ら研修を行う。そして研修を無事修了すれば、香港に送られるという流れである。コミラ TTC はこの人材派遣会社が研修を行うため施設を提供している[12)]。

下に掲げる表２は、中東向け出稼ぎと香港向け出稼ぎの相違点を整理したものである。

表２　出稼ぎ先による募集条件や待遇などの比較

	中東	香港
年齢制限	25-35歳	25-45歳
最低学歴（就学年数）	5年[(1)]	10年（英語できれば8年でも可）
契約期間	2-3年（更新可）	2年（更新可）
最低月給	1万7000タカ(サウジアラビアの場合)	4万5200タカ
一般的な送金額（月額）[(2)]	月給のほぼ全額	２～３万タカ
労働条件	住み込み。週休１日	住み込み。週休１日
研修・渡航・滞在・帰国費用	全額雇用者負担で無料[(3)]	渡航等の費用として15万2000タカ。他は全て無料。
研修期間	30日	60日
主な研修内容	家事の仕方、語学（アラビア語）、その他	家事の仕方、語学（広東語）、その他
その他[(4)]	雇い主に虐待(abuse)されたという報道もしばしばある。成功率80%。	雇い主が中国人なので豚肉に抵抗感がなく英語ができ民族的にも中国人に似た少数民族が好まれる傾向がある。家庭内の高齢者の世話をする仕事が多い。成功率90%。

出所：　コミラTTCの研修担当者からのヒアリングおよびComilla TTC（2016)等による。
注：1.　最低学歴5年(小学校卒業）という制限は、最近設定されたもので、以前はなかった。
　　2.　研修担当者による。
　　3.　実際には、いろいろな理由をつけて業者が渡航手続きの手数料を出稼ぎ希望者から取ることもある。
　　4.　出稼ぎの「成功率」は、研修担当者の判断による。
　　5.　1タカはおよそ1.3円（2019年9月）。

(3) アンケート調査の主な結果と分析

本稿の中心となるこの節では、女性海外出稼ぎ者の社会経済的な特徴や出稼ぎを決心するに至った経緯、出稼ぎの目的そして帰国後の計画や期待を、中東への出稼ぎ予定者（以下、「中東研修生」とする）と香港への出稼ぎ予定者（以下、「香港研修生」とする）に分けて見ていきたい。

①　研修生の出身地域と宗教および民族

まず、研修生の出身地を見てみよう。調査の実施場所がコミラ県であるため、回答者もコミラ県

出身者が 158 人中 60 人と最も多く、ノアカリ県 17 人、カグラチョリ県の 9 人など、コミラ県と同じチッタゴン管区の県が多い。しかし、北西部のロングプール県（ロングプール管区）（4 人）、南西部のシャトキラ県（クルナ管区）（3 人）など遠い地域の出身者もおり、全国から研修生が集まっている。チッタゴン丘陵地帯のカグラチョリ県からの研修生が多いのは、すぐ後で見るように、そこは仏教徒の少数民族が多く住む地域で、香港研修生の多くの出身地だからである。

次に、彼女たちの民族と宗教について見る。ムスリム人口の割合が大きい中東への研修生は、有効回答者のすべてがムスリムであり民族的にはベンガル人であった[13)]。なお、バングラデシュ人の 90.4% はムスリムで、ヒンドゥー教徒が 8.5%、キリスト教徒が 0.6%、仏教徒が 0.3% となっている（Population Census 2011）。

一方、香港研修生にはベンガル語を母語としない少数民族が多い。特に、チッタゴン丘陵地帯に住むモンゴロイド系少数民族のマルマが 13 人と多かった。宗教的には仏教徒（14 人）とキリスト教徒（10 人）が多く、ムスリム（9 人）よりも多かった。ヒンドゥー教徒は 1 人だけであった。

このように、出稼ぎ先と民族・宗教の間には強い関係が見られる。それは、出稼ぎ先での食生活と大きな関係があると考えられる。ムスリムが多い中東の家庭では、牛肉を食べることが日常的に行われていると考えられるが、それは牛を神聖視するヒンドゥー教徒にとって好ましいことではない。また、香港ではイスラム教で不浄だとされる豚肉が一般的に食されており、ムスリムの女性は行きたがらないであろうし、表 2 にあるように雇い主としても、できれば豚肉に抵抗を感じない非ムスリムを雇いたいという希望がある。こうしたことから、出稼ぎ先と宗教、そして民族の対応関係が生まれてくるのだと考えられる。ただ、香港研修生のおよそ 4 分の 1 がムスリムであることからわかるように、その関係は絶対的なものではない。

また、出身地を都市と農村という区分でみると、無回答を除いた 139 人中 125 人（89.9%）が農村出身者で、都市出身者は 14 人に過ぎなかった。圧倒的に多くの研修生が農村出身者であった。

表 3　研修生の出稼ぎ先と宗教・民族の関係

（人）

出稼ぎ先	研修者数	宗教					民族			出身地域		
		イスラム教	ヒンドゥー教	仏教	キリスト教	無回答	ベンガル人	少数民族	無回答	農村	都市	無回答
中東	119	117	0	0	0	2	113	0	6	98	8	13
香港	35	9	1	14	10	1	17	18	0	27	6	2
全体	154	126	1	14	10	3	130	18	6	125	14	15

出所：筆者実施のアンケート調査
注：非ベンガル人（少数民族）の研修生は、マルマが13人、ボム、チャクマ、サンタル、トンチャンガン、オラオが各一人だった。

②　年齢と教育

次に、研修生の年齢と教育、結婚状況について見てみよう（表 4）。研修生の平均年齢は中東研修生が 27.9 歳、香港研修生が 26.2 歳で香港研修生が若干若い。年齢の幅は中東研修生が 20 歳から

40 歳、香港研修生が 14 歳から 39 歳となっている。

家事労働者の募集には年齢制限があり、中東の場合は 25 歳から 35 歳、香港の場合は 25 歳から 45 歳までである。しかし、25 歳未満の研修生が少なくないことがこの表からわかる。さらに、25 歳に年齢の集中度が高いのは、実際に 25 歳の人が多いというよりも、本当はそれよりも若いが 25 歳と答えた人が少なくないからではないだろうか[14)]。規則で決められた最低年齢より若い人が、実際は表 4 よりも多い可能性がある。

表 4　研修生の出稼ぎ先と年齢

（人）

出稼ぎ先	研修生数	20歳未満	20歳	21～24歳	25歳	26～29歳	30歳	31～34歳	35歳	36～39歳	40歳	平均年齢（年）
中東	119	0	2	6	36	39	13	9	8	5	1	27.9
香港	35	3	1	6	10	5	5	3	0	2	0	26.2
全体	154	3	3	12	46	44	18	12	8	7	1	27.6

出所：筆者実施のアンケート調査

教育程度はどのくらいであろうか。就学年数に対する質問では、研修生の教育水準（就学年数）は中東研修生が平均 2.6 年、香港研修生が平均 9.5 年で、両者の間に大きな差が見られる（表 5）。就学年数の幅を見ると、中東研修生は 0 ～ 12 年（HSC：高卒）で、香港研修生は 3 年から 14 年（BA：大学卒）と大きな幅がある。中東研修生で最も多いのは全く就学経験のない人で、中東研修生全体 119 人中 61 人（51.2%）とおよそ半分を占めている。全く就学経験がない人を含め就学年数が 5 年未満の人が 84 人と 7 割（70.6%）を占める。TTC の研修担当者の話では、中東行き家事労働者は現在最低 5 年（小学校卒業）の学歴が求められているが、実際はそれに達しない人が過半である。

香港研修生の場合は、研修担当者によると 8 年以上の就学経験が条件となっているため、中東研修生と比べ学歴はだいぶ高い。大学卒の人も 1 人いた。一方、条件（8 年以上）に満たない研修生が 35 人中 4 人いた。

このように、年齢と就学年数において応募条件を満たさない研修生が多いことが分かる。10 代の少女やまったく学校に通ったことがない多くの女性が、国境を越えて外国に出稼ぎに行くのである。

表 5　研修生の就学年数

（人）

出稼ぎ先	研修生数	0（就学経験なし）	1	2	3	4	5（小学卒）	6～7	8	9	10（中学卒）	12（高校卒）	14（大学卒）	無回答	平均（年）
中東	119	61	0	4	10	9	13	7	9	0	4	1	0	1	2.6
香港	35	0	0	0	1	1	1	1	7	3	11	9	1	0	9.5
全体	154	61	0	4	11	10	14	8	16	3	15	10	1	1	4.2

出所：筆者実施のアンケート調査
注：就学経験のない人でも、自分の名前は書ける人がほとんどである。

③　研修生の家族の状況

続いて、こうした女性がなぜ外国まで出稼ぎに行くのか、その背景を探ってみよう。

まず、婚姻状況だが、中東研修生はほとんど結婚経験があり、未婚者は 119 人中 2 人（1.7％）だけであった。ただ、結婚経験があっても、離婚している人が 25 人（21.0％）、夫と別居中の人が 24 人（20.2％）、夫と死別した人（未亡人）が 8 人（6.7％）と、計 58 人（48.7％）、およそ半数は実質的に夫がいない女性である。また表 6 で「既婚」者とした人の中にも夫と別居中の女性が含まれている可能性が高く [15)]、中東研修生の中には、夫の収入に頼れない女性が過半を占めていると考えられる。一方、香港研修生には未婚者と既婚者がほぼ半数ずついる。未亡人や夫と別居中という回答はなかった。

表 6　研修生の家族状況

（人）

出稼ぎ先	研修者数	婚姻状況					子どもの数				
		既婚	未婚	離婚	未亡人	夫と別居	0人	1人	2人	3人	4人
中東	119	60	2	25	8	24	11	55	32	14	7
香港	35	16	16	3	0	0	23	5	5	2	0
全体	154	76	18	28	8	24	34	60	37	16	7

出所：筆者実施のアンケート調査
注：「既婚者」と「夫と別居」中の人の関係については、本文の注15を参照のこと。

婚姻状況は、それぞれが持つ子供の数とも強い関係にある。中東研修生は、大半（9 割）が子供を持っている。一人のことが多いが、2 人、3 人の子供を持つ人も多く、4 人の子供を抱えている人もいる。そして子供たちの年齢は低く、ほとんどが学校に通っている。これから、中東研修生の一般的な状況として、大半は結婚経験があるがほぼ半数は離婚をしたり別居中あるいは未亡人で夫の収入に依存できない状況にあり、しかも就学中や幼い子供がいる人がほとんどである、という姿が浮かび上がってくる。

一方香港研修生は、未婚の人が半数で子供のない人も多く、経済的重圧や社会的責任が相対的に小さい人が多いことがわかる。

④　研修生の経済的背景と職業経験の有無

次に、研修生の経済的な状況を確認していこう。バングラデシュでは農業が伝統的な産業であり、現在でも農地を持つか否かが、経済的な状況を決定する大きな要因となっている。研修生の大半が農村出身者であることからも、農地を持つか否かは、研修生の経済状況を見る上で重要である。また、自分の宅地を持っているか否かは、極貧とそれ以外を分ける重要な境界となる。

表７　研修生の宅地と農地の所有状況

（人、エーカー）

出稼ぎ先	研修生数	宅地所有の有無			農地所有面積（エーカー）						
		ない	ある	無回答	0	0.01～025	0.26～0.50	0.51−1.00	1.01～1.50	無回答	平均（エーカー）
中東	119	45	74	0	84	21	5	2	0	7	0.06
香港	35	3	31	1	21	3	8	0	1	2	0.15
全体	154	48	105	1	105	24	13	2	1	9	0.08

出所：筆者実施のアンケート調査

研修生の内、香港研修生では宅地を持たない人は 35 人中 3 人（8.6%）しかなかったが、中東研修生では 119 人中 45 人（37.8%）が宅地を持たないと回答した。これから、中東研修生に非常に貧しい人が多いことが推測される。

さらに中東研修生では 84 人（70.6%）が農地を持たないと答えている。香港研修生も 21 人（60.0%）が農地を持たないと答えており、香港研修生の多くも決して豊かではないことがわかる。所有農地の平均面積を見ると、中東研修生が 0.06 エーカーときわめて少なく、香港研修生も 0.15 エーカーにすぎない。

表８　研修生の経済的状況

（人）

出稼ぎ先	研修生数	自分の経済的状況				
		非常に貧しい	貧しい	中流	良い	非常に良い
中東	119	70	36	12	1	0
香港	35	5	14	13	2	1
全体	154	75	50	25	3	1

出所：筆者実施のアンケート調査
注：周りの人と比べて自分の経済状況はどうかという質問に対する回答である。

次に、自分の経済的状況を、周囲に暮らす人々と比べて、「非常に貧しい」、「貧しい」、「中流」、「良い」、「とても良い」のどれに当たるか、自己評価をしてもらった（表 8）。その結果、中東研修生では「非常に貧しい」と答えた人が過半（70 人、58.8%）を占めた。「貧しい」（36 人、30.3%）を含めると、ほとんどの研修生（119 人中 106 人、89.1%）が、自分は貧しいと認識している。一方香港研修生には極貧状態の人は少なく、「貧しい」と「中流」が多い。「良い」、「非常に良い」と答えた人もいた。これから、香港研修生の多くは、豊かとはいえないにしても、最貧困という人たちではないことが分かる。

こうした経済的な差は、すでに見たように土地所有状況や彼女たちが受けてきた教育状況の差からも容易に推測できるが、彼女たちの世帯の主要な収入源からも確認できる（表 9）。香港研修生では農業が主要な収入源であると答える人が突出して最も多く（45.7%）、ほぼ半数を占めた。続いて、建設

業などの日雇労働（17.1%）、商店や学校、NGO などで働いて決まった給料をもらう勤め（チャクリー）、商売、海外からの送金などとなる（多くは夫や父親の収入）。一方、中東研修生の世帯で最も多い収入源は日雇労働（農業、非農業）であり（19.3%）、農業（16.0%）、他人の家での家事労働（15.9%）、ガーメント工場（8.4%）、リキシャ引き（6.7%）、勤め（6.7%）、と続く。日雇労働や他人の家での家事労働、ガーメント工場、リキシャ引きなどは、一般的に収入も少なく土地を持たない貧しい人が携わる仕事である。これからも、中東研修生は香港研修生に比べて経済的に貧しい状態にあることが分かる。

表 9　研修生の家庭の主な収入源

（人）

出稼ぎ先	研修生数	主要な収入源											
		農業	日雇労働	家事労働	商売	勤め	ガーメント工場	海外送金	リキシャ引き	運転手	工場	援助	不明/無回答
中東	119	19	23	18	9	8	10	6	8	7	3	1	7
香港	35	16	6	0	3	4	1	3	0	0	0	0	2
全体	154	35	29	18	12	12	11	9	8	7	3	1	9

出所：筆者実施のアンケート調査
注：本表での「家事労働」は、他人の家での家事労働を意味する。

表 10　研修生の職歴

（人）

出稼ぎ先	研修生数	出稼ぎ前にした仕事(複数回答)										
		家事使用人	仕事経験なし	ガーメント工場	家事	勤め	海外出稼ぎ	農業労働	仕立て	その他	無回答	合計
中東	119	44	35	19	7	7	5	4	1	3	1	126
香港	35	1	7	5	13	4	2		2	1	1	36
全体	154	45	42	24	20	11	7	4	3	4	2	162

出所：筆者実施のアンケート調査
注 1. 複数の職業経験を持つ人がいるため(8人)、各職業経験者の合計数は研修の数(154)を上回る。

それでは、彼女たちは実際にどのような仕事の経験をしてきたのだろうか。中東研修生では、今まで何の職業にも就いた経験がない人が 119 人中 35 人（29.4%）、およそ 3 割いたが、もっとも多いのは、他の家庭で家事労働をした人で、119 人中 44 人、37.0%に達する。次に多いのはガーメント工場で働いていた人で、19 人、16.0%を占めた。他には、ガーメント工場以外の工場や学校での勤め（7 人）、外国ですでに家事使用人などとして働いたことがある人（5 人）、農業労働者（4 人）などがいる。これから、中東研修生のほぼ 3 分の 2 は、他人の家での家事労働やガーメント工場での勤めを中心に、家庭外での何らかの就業経験がある人だといえる。このような女性は、家庭の外で女性が働くことがまだ少ないバングラデシュの中では、少数派であるといえよう。

一方、香港研修生の中では、これまでにした仕事として「家事」を挙げた人が最も多かったが(37.1%)、その多くは自宅での家事である。また、これまで働いた経験がないという人がこれに続く（20.0%）。こうした人を除けば、ガーメント工場での就業経験者（14.3%）、勤めの経験者（11.4%）などが多い。

⑤　海外出稼ぎに出る目的

以上から、中東研修生の中には、きわめて貧しく、他人の家で家事労働をしたりガーメント工場などで働いた経験がある人が多いことがわかる。一方、香港研修生の多くは極貧とはいえず、これまで家庭の外で働いた経験がない人が多いことがわかる。

それでは、彼女たちが出稼ぎに出る目的は何であろうか。海外出稼ぎの主要な目的を3つを挙げてもらったところ(表11)、最も多い回答は、「生活費を工面するため」であり、154人中138人(89.6%)が1～3位のどれかとして挙げた。中東研修生では119人中85人（71.4%）が、香港研修生では35人中17人（48.6%）が、出稼ぎの最大の目的として挙げている。これから、特に、貧しい人が多い中東研修生の中では「生活費を工面するため」が突出して重要な目的となっていることがわかる。自由回答欄には「今のままでは生活できない」という記述が多く、困窮によりしかたなく海外出稼ぎを決めた人が大半であることがわかる。

二番目に多い目的は「自立するため」[16]で、中東研修生ではおよそ6割（58.0%）が1～3位のいずれかに重要な目的としてあげた。香港研修生では8割近く(77.1%)が出稼ぎの目的としてあげ、最大の目的としてあげた人も4割近く（37.1%）に上っている。「自立する」がどのような意味に理解されたか必ずしも明らかではないが、自分の収入源を得て他人に頼らなくてよい豊かで安定した生活をしたいということではないだろうか。そうした欲求が、海外出稼ぎの重要な誘因になっていると思われる。

続いて多いのは、「土地を買うため」、「子供の教育のため」である。研修生、特に中東研修生の中には宅地を持たない極貧の人が多いため、自分が住むための土地をまず買いたいという人が多いことが推測される。また、子供にしっかりとした教育を付けてやりたいという欲求も、多くの研修生にとって海外出稼ぎの大きな理由になっている。

他には、「レンガ造りやコンクリートの家[17]を建てるため」、「借金を返すため」、「商売をするため」などが比較的多い。「自分の結婚資金のため」、という人もいた[18]。

表11　海外出稼ぎの主な目的

（人）

出稼ぎ先	研修生数	出稼ぎの主な目的（3つ以内）										
		生活費	自立	土地を買う	子供の教育	家を建てる	借金返済	商売	自分の結婚費用	他の国を見る	その他	合計
中東	119	109	69	61	51	19	16	10	2	2	5	344
香港	35	29	27	11	10	10	5	6	4	1	1	104
全体	154	138	96	72	61	29	21	16	6	3	6	448

出所：筆者実施のアンケート調査
注　：複数回答のため、合計数は研修生の数(154)を上回る。

⑥　出稼ぎを決めた経緯

では、彼女たちはどのようにして、海外に出稼ぎをすることを決心したのだろうか。この調査では、海外出稼ぎをどのように決めたか、周囲からの影響などについても聞いた。

下の表は出稼ぎを決めるに当たって、誰かの勧めがあったかという質問に対する回答である（複数回答）。圧倒的多数の 85.7％が、「自分の意思で決めた」、と答えている。ほとんどの研修生にとって海外出稼ぎが主体的な決定によることがわかる。続いて、既婚者が多い中東研修生では「夫」の勧めが大きな影響力を持っている（50 人、42.0％）。中東研修生 119 人中、別居中を除く既婚者は 60 人なので、夫と暮らす既婚者の大半が夫婦で相談して女性の出稼ぎを決めたことがわかる。子供がある程度大きくなって教育などにお金がかかるようになり、家を建てたり商売も始めたい。できれば土地も買いたい。しかし、現在の収入は少なく、夫が海外出稼ぎに出るには大金が必要である[19]。夫が病気などで満足に働けず、借金がたまっているという人もいる。そこで、ほとんどお金がかからず多額の収入が見込める中東での家事労働者として妻が出稼ぎに出たらどうか、という話が夫婦の間に出てくるのではないだろうか。

他には、兄弟姉妹や親せきの影響が大きく、海外出稼ぎから戻ってきた女性の勧めで決めたという人もいる。一方香港研修生では、未婚者が多いこともあり、親の勧めが相対的に多い。香港研修生の回答に見られる「TTC（技術訓練所）の職員」は、香港に家事使用人を送る TTC の研修担当者が各地をまわり研修生を募集していたときに勧誘されて決めたということである。

表 12　出稼ぎを決めた経緯

（人）

出稼ぎ先	研修生数	出稼ぎを決めるに当たってアドバイスをしてくれた人（複数回答）											
		自分の決心	夫	父	親せき	母	兄弟	外国帰りの女性	姉妹	TTC職員	友達	その他	合計
中東	119	103	50	9	14	8	10	9	7	0	0	1	211
香港	35	29	6	8	2	7	1	2	0	4	1	0	60
全体	154	132	56	17	16	15	11	11	7	4	1	1	271

出所：筆者実施のアンケート調査
注　：複数回答のため、合計数は研修生の数(154)を上回る。

また、近年国内のガーメント工場などで働く女性が多いことから、なぜ国内（例えばガーメント工場）で働こうとしないのか、について聞いた（自由回答）（表 13）。最も多い答えは、「給料が低いから」であり、特に香港研修生ではほとんど全員がそう答えた。確かに、ガーメント工場労働者の最低賃金は月 8000 タカ（2019 年 9 月 6 日のレートでおよそ 1 万 120 円）に過ぎず、筆者の調査によると、熟練工でも月 1 万 2000 タカ程度だといわれている。家事使用人の賃金は更に少ない。

それに対して、海外出稼ぎの月給は、中東の家事使用人で 1 万 7000 タカ（およそ 2 万 1500 円）、香港の家事使用人では 4 万 5200 タカ（5 万 7000 円）であり、ガーメント工場の給料よりもかなり高い。しかも、住み込みであるため住居費や交通費がかからず、食費、日常の衣類、医療費なども雇い主が負担し無料である。本人が望むなら、給料のほとんど全額をバングラデシュに残された家族に送ることができる。実際、どの程度の額を送金したいと思うか聞く質問に対し、中東研修生で

は期待される月給の平均額1万9954タカのうち平均1万6400タカ（82.2%）を家族に送金するという回答が得られた。同様に香港研修生も、期待される月給4万5200タカのうち2万7100タカ（60.0%）を送金するつもりだと答えている。いずれも、国内のガーメント工場で働く場合の収入よりも、かなり多い額である。

また、中東研修生の多くが、国内のガーメント工場などで働こうとしても仕事が得にくいことを、海外出稼ぎを選んだ理由として挙げている。仕事が得にくい理由として、ガーメント工場ではある程度の教育がないと受け入れられないことを挙げた人がいた。学校教育を受けたことがない人（かろうじて自分の名前を書ける程度）が多い中東研修生にとって、ガーメント工場で働くことも困難なのである。ワイロを渡さないと仕事が得られない、という回答もあった。

また、ガーメント工場の仕事は残業も多く、「仕事がきつい（ポリシュロム　ベシー）」ことからも敬遠されている。ほかにも、「周りの人々に悪口を言われたり蔑みの目で見られる」[20]、「ハラスメントがある」、といった理由からガーメント工場で働きたくない、という回答もあった。

表13　国内で仕事（例えばガーメント工場での仕事）を探さない理由

（人）

出稼ぎ先	研修生数	給料少ない	仕事が得にくい	仕事がきつい	ハラスメントがある	ワイロが必要	人々が悪く見たり言ったりする	安定性低い	仕事の知識がない	その他	合計
中東	119	99	52	44	7	6	4	0	1	16	229
香港	35	33	9	8	0	0	0	2	0	0	52
全体	154	132	61	52	7	6	4	2	1	16	281

出所：筆者実施のアンケート調査
注　：複数回答のため、合計数は研修生の数(154)を上回る。

こうした中で、海外での家事労働という仕事はどのように見られているのだろうか。自分の周囲に海外で働いている女性がいるかを聞いたところ、およそ3人に2人（154人中89人、58.8%）が、「いる」と答えた（表14）。多いのは、姉妹（38人）、おば（21人）、女性のいとこ（12人）、義理の姉妹（11人）などである。自分の母親が外国で働いているという人も3人いた。

このように研修生の3人に2人程度は、海外で働いている身近な女性がいる。そのほとんどは、中東で家事使用人として働いている女性だと思われる。また少なからずの研修生が、兄弟や叔父、男性のいとこなど身近な男性に海外で働いている人がいると答えている。こうしたことから、海外での家事使用人の仕事の内容、また、そのよい点と危険などについて、ある程度の情報を得ている人が多いと考えられる。

では、そうした身近な人を通じて、海外で働くことをどのように捉えているのだろうか。その問いに対しては、回答者の全員が、「よい」、「とてもよい」と答えた（「よい」が103人、「とてもよい」が10人）。多くが、海外出稼ぎ者がいる家庭は「生活がよくなった」と感じ、海外で働くことに「何の問題もない」、と思っている。海外で働く身近な人から話を聞いたり、海外で働くことでその人たちの生活が向上していくのを見て、自分も行こうと決心したことがうかがえる。

表 14　海外で働く身近な女性

（人）

出稼ぎ先	研修生数	自分の周りに海外で働く女性がいるか？		それは誰か？（自由回答）								
		いる	いない	姉妹	おば	いとこ	義理の姉妹	親せき	近所の人	姪	母親	友人
中東	119	67	52	29	17	10	9	1	5	3	3	0
香港	35	22	13	9	4	2	2	4	0	1	0	2
全体	154	89	65	38	21	12	11	5	5	4	3	2

出所：筆者実施のアンケート調査

⑦　出稼ぎを控えた気持ちと帰国後の計画や夢

それでは、出国を控えて、彼女たちはどのような気持ちでいるのだろうか。それに対する回答から（表 15)、行き先によって、また人によって感じ方が大きく異なることがわかる。一般に、香港研修生は「うれしい」と感じている人が多い。また、「怖い」、「悲しい」と感じている人は少ない。これは、香港が安全で豊かな場所だと考えられていること、給料が多いこと、研修生に若くて未婚の人が多く、自分の将来の夢を実現するためのステップとして出稼ぎを考えている人が多いからではないだろうか。

表 15　海外に行くことに対する現在の気持ち (複数回答）

（人）

出稼ぎ先	研修生数	うれしい	うきうきする	怖い	悲しい
中東	119	45	3	45	42
香港	35	25	6	6	1
全体	154	70	9	51	43

出所：筆者実施のアンケート調査

香港研修生に見られる、こうした前向きな回答をいくつか紹介する。

Aさん：「外国に行ったらたくさんのお金が稼げる。素晴らしい人生になるだろう。帰ったら、家を建て、商売をし、両親の近くで暮らす。」(25 歳、未婚、中卒（10 学年)、農村在住、宅地はあるが農地はない、現在の生活は中流、10 年滞在を希望)

Bさん：「よい給料をもらい、そのお金で自分の家族と自分はよい生活を送る。外国から戻ったら土地を買い、家を建て、商売をし、家族がよい暮しをできるよう努力する。これが自分の夢です。」(30 歳、離婚、子供なし、中卒、農村在住、宅地も農地もない、生活はとても貧しい、10 年滞在を希望)

Cさん：「私は将来自立できるだろう。子どもたちをよく育てられる。家を作り、土地を買う。商売をし、子供に高い教育を受けさせ給料をもらえる仕事（チャクリー）に就かせる。」(28 歳、既婚、子供 2 人、中卒、農村在住、宅地はあるが農地はない、夫は農業、生活は中流、10 年滞在を希望)

一方、中東出稼ぎ者では、「怖い」、「悲しい」、「うれしい」という気持ちが拮抗し、複雑な気持ちでいることがうかがわれる。中東の家事使用人としての仕事では今まで得たことのない多くの収

入が期待できる一方で、「過重労働」、「賃金未払い」、「ハラスメント」といった問題が起こることがしばしば報道され（Rabbi 2019）、時には「レイプ」などの重大事件も話題になる。こうしたことから、「よい家族に雇われるだろうか」、「給料や食事をきちんともらえるだろうか」、という心配が先立つのである。以下はそうした心配をする人の例である。

Dさん：「（海外に行くのは）怖いし、悲しい。みんなを置いていく。子供が苦労をする。（行き先で）危険はないだろうか。月給2万タカのうち1万5000タカを送金したい。帰ったら、子供と一緒に幸せにくらす。家を建てる。土地を買って農業をする。牛やヤギを飼う。」（35歳、教育なし、農村在住、宅地あり、所有農地は0.25エーカー、既婚者、夫は日雇労働者、本人は他人の家で家事労働をしていた、子供は息子一人で2年生、サウジアラビアで3年働らく希望あり）

Eさん：「外国に行くのは、怖いし、悲しい。娘たちを置いて行く。どのような場所なのか。ちゃんと給料をもらえるか。乱暴されないか。帰ったら、家を建てる。土地を買う。牛やヤギを飼う。」（35歳、教育8年、農村在住、宅地あり、所有農地はない、夫は死亡、他人の家で家事労働をして暮らす、子供は2人娘で8歳と5歳、サウジアラビアで2年働く希望あり）

一方、中東研修の中にも外国での新しい生活に期待している人が少なくない。以下は、その例である。

Fさん：「外国に行けてうれしい。新しい国が見られる。幸せに暮らせる。たくさん給料をもらい、お金を貯める。月給2万タカのうち、毎月1万9000タカを送金する予定。帰ったら、ビスケット工場のビジネスを始める。土地を買う。子供によい教育を受けさせる。貧しい生活をしない。」（25歳、就学経験なし、宅地はない、夫とは離婚、父は日雇労働、本人はビスケット工場で働いていた。10歳、3年生の娘あり。サウジアラビアで5年働く希望あり）

Gさん：「外国に行くのは、うれしい。新しい国を見られる。たくさん学び、知ることができる。たくさん給料もらう。幸せに暮らしたい。月給1万8000タカのうち、1万7000タカを送金する予定。バングラデシュでは、仕事が見つからないし、ガーメント工場で働くのは恥ずかしい。バングラデシュでは給料が少ないし、ちゃんと給料もらえない。帰ったら、子供たちに高い教育を受けさせる。土地を買い農業をして家を建てる。幸せに暮らす。進んだ生活をする。」（26歳、就学経験なし、宅地なし農地なし、夫とは別居、父はCNG（3輪タクシー）運転手、本人は働いた経験なし、9歳（2年生）と5歳の子供あり、オマーンで3年働く予定）

このように、研修生、特に中東研修生の気持ちには、悲観的なものから楽観的なものまで、大きな幅が見られる。そこには、海外出稼ぎにより現在の貧困から抜け出せるという大きな期待と同時に、行き先で待っているかもしれない危険に対する恐怖、2年から3年の間家族と別れて暮らすことの悲しみなど様々な感情が混在しているといえよう。

そして、出稼ぎから帰国した後どのような生活をしたいか、将来の計画あるいは夢を聞いたところ、先に尋ねた出稼ぎの目的と同じように、「家を建てる」、「土地を買う」、「商売を始める」、「子供に教育を受けさせる / 子供を幸せにする」、「家畜を飼う」、「自立する」、といった回答が並んだ。一言で言えば、安定した豊かな生活をし幸せに暮らしたい、そのためには商売や農業などの安定した収入源を確保して、子供にもよい教育を受けさせ、家族一緒に幸せな生活を送りたい、という、ごく普通の夢を描いていることがわかるであろう。大きなリスクはあるが、貧しくて教育もほとんどなく、頼れる夫がいない女性でも、こうした夢を実現できると考えられている方法が、家事使用人としての海外出稼ぎなのである。

第 4 節　まとめと結論

1990 年頃から男性労働力の海外輸出を積極的にしてきたバングラデシュだが、2000 年代に入り女性の海外出稼ぎが激増した。女性出稼ぎ者の出国者数は現在年間 10 万人を超えている。その主要な行き先と目的は中東で家事労働の仕事に就くことだが、香港を始め先進国 / 地域への出稼ぎも始まっている。

その背景には、豊かな中東や先進国において低廉な家事労働者への需要が高いこと、女性家事労働者の主要送出国であるフィリピンやスリランカなどで女性労働者の輸出が抑制されたり賃金が高騰したことなど国際的な要因が考えられる。それが、低廉な女性労働力が豊富にあり近年官民挙げて女性労働力の輸出に積極的になったバングラデシュへの需要増加につながったのではないだろうか。

一方、家事労働のため海外に赴く女性たちは、貧困からの脱出と自らの夢の実現への期待を、海外出稼ぎにかけている。中東へ向かう女性の多くは教育を全くないしほとんど受けておらず、離婚や夫と死別したり夫と別居中の極貧女性が多い。こうした女性の多くは、すでに他人の家で家事労働者やガーメント工場での工員として働いた経験がある。しかし、国内での仕事（家事労働、ガーメント工場勤め）の賃金は少なく、それだけで十分な生活をするには厳しい状況に置かれている。また、近年は貧しい家庭の子供たちも学校に行くことが一般化しており（須田 2019、押川・南出 2016）、子供の教育は貧しい世帯にとって大きな負担である。こうした状況に置かれた貧困女性にとって、家事労働目的の海外出稼ぎは魅力的である。慣れない外国で暮らすことへの不安や、時として家事使用人が虐待の被害にあったという情報が入り心配もあるが、男性の海外出稼ぎと違って渡航の費用がかからず、教育の有無もほとんど問われず、国内の家事労働やガーメント工場よりもずっと多くの給料がもらえるからである。また、家族や親戚の中に家事労働者として海外で働く人がいれば様々な情報が得られ、参入への敷居が低くなる。

経済先進地域の香港への出稼ぎ者は、さらに積極的に海外での就労を位置づけている。若くて未婚者が多く、ある程度の教育を受けている彼女たちは、自分の人生プランの中に 5 年から 10 年香港で働いて多額の貯金をし、それを元手に将来豊かで安定した生活をしたいと考えている。経済が発展した香港での生活は彼女たちにとって魅力的であり、中東のような危険もほとんどない。まだ、香港など先進国 / 地域への家事労働目的の出稼ぎは始まったばかりだが、認知度が高まり、初期費用を抑えるシステムが導入されれば、今後希望者が大きく増える可能性がある。宗教の壁を越え、ムスリム女性が増加する可能性もある。

バングラデシュでは現在急速に教育が普及しており女性が働くことが一般的になりつつある。一定の質を備えたバングラデシュの豊富な女性労働力を、少子高齢化が進み労働力不足が深刻化する先進国 / 地域での労働市場に供給できれば、双方にとって大きな利益となるであろう。日本でも介護や農業分野などを含む多方面での外国人労働力の受け入れが進んでいる。近年始まったバングラ

デシュ人女性の香港への出稼ぎは、日本とバングラデシュの将来の関係に示唆することが多いのではないだろうか。それについての研究は、今後の課題としたい。

注

1）本稿執筆時の 2019 年では、1 月から 7 月までの出国者は 6 万 8938 人である。このペースが続けば、2019 年においても年間出国者が 10 万人を超えることはほぼ確実だと予想される。

2）BMET（Bureau of Manpower, Employment and Training: 人材雇用訓練局）の資料によると、1991 年から 2019 年までの期間に雇用目的で出国した女性は 86.7 万人であるが、このうち 96.6％の行き先が中東である。特に、サウジアラビア（37.2％）、ヨルダン（17.3％）、UAE（15.0%）、レバノン（12.3%）、オマーン（9.6%）が多く、この 5 か国で全体の 9 割を超えている。本稿では香港に行く予定の研修生の分析も行っているが、BMET の資料によると、香港への出稼ぎ女性の累計は 1729 人で、全体に占める割合は 0.2% に過ぎない。ただ、先進国では香港が最も多く、シンガポール（1370 人）、イタリア（464 人）、UK（153 人）と続く。中東以外の国として多いのは、マレーシアの 6631 人で、全体の 0.8% を占める（BMET n.d.a）。

3）コミラ県にある政府の技術訓練学校（Technical Training Centre :TTC）でのヒアリングによる。

4）注 3 と同じく、コミラ県の技術訓練学校（Technical Training Centre :TTC）でのヒアリングによる。

5）2017 年の女性の雇用目的出国者数 7.3 万人のうち、家事労働者は 5.6 万人である。

6）国民の豊かさの指標である 1 人当たり GNI（国民総所得）（2018 年）を比較すると、バングラデシュが 1750 ドルであるのに対し、スリランカは 4060 ドル、インドネシアは 3840 ドル、フィリピンは 3830 ドルと倍以上である（World Bank）。当然賃金水準もバングラデシュより高い。

7）Sri Lanka Bureau of Foreign Employment のホームページの情報による（ 2019 年 8 月 27 日アクセス）。

8）コミラ TTC 発行の、中東行き家事労働者のための研修マニュアル（Comilla TTC 2016）による。

9）TTC は、電気工事、電気製品修理、溶接、自動車整備、配管工事、設計、コンピュータグラフィックス、木工、服の仕立て、などを教える政府の職業訓練学校で各県にある。コミラ TTC では、2010 年ないし 2011 年から中東に、2014 年から香港に家事（House Keeping）目的で出稼ぎに行く女性たちの出国前研修を行っている。2019 年 3 月のヒアリング時点で、コミラ TTC で研修を受けて出稼ぎに行った家事労働者の累計は中東行き女性がおよそ 8000 人、香港行き女性が 262 人に上るという。

10）本調査は 2019 年の 3 月と 7 月に行われた。その際､3 月の調査（中東研修生 46 人､香港研修生 17 人の計 63 人）の欠点を踏まえて 7 月の調査（中東研修生 73 人、香港研修生 18 人の計 91 人）では、調査票に僅かであるが変更を加えている。

11）BMET のホームページによると､バングラデシュには 2019 年 9 月現在で 1305 の有効な人材募集業者が存在する。

12）研修担当者の資料によると、2019 年 3 月時点でバングラデシュでは 6 つの県の TTC がこの会社の研修を行っている。コミラ TTC、タンガイル TTC、マイマンシン TTC、ボグラ TTC、バンドルバン TTC、そしてカグラチョリ TTC である。ほぼ全国に散らばるが、仏教徒のモンゴロイド系少数民族が多いチッタゴン丘陵地帯に二つの研修所があるのが注目される。

13）無回答の 6 人も、居住地（チャンドプール県 3 人、コミラ県 2 人、ジョソール県 1 人）から、すべてないしほとんどがムスリムのベンガル人であると推測される。

14）筆者が 2018 年にコミラ県の農村で、娘が中東（レバノン）に家事使用人として出稼ぎに行っているという貧しい家庭にヒアリング調査をしたとき、娘の実際の年齢は 15 歳であったが、募集条件に合うよう年齢を偽って出稼ぎに行ったと話していた。辻上は、年齢を偽ったパスポートで 10 代の若い女性がサウジアラビアに家事労働者として働きにくることが日常茶飯事となっており、問題視されているという（辻上 2014, p.9, pp. 106-107）。研修生の中には、募集条件よりも実際は若い女性が少なくない可能性がある。しかし、バングラデシュの農村では 14、15 歳で結婚する女性も多く、この年齢になれば一人前の大人として扱われているのも事実である。また日下部（2018）が記しているように、バングラデシュでは 10 歳に満たない女児が家事使用人として住み込みで働くこともめずらしくない。

15）2019 年 3 月に調査をする過程で、既婚女性の中に夫と別居中の人が少なくないことがわかり、途中から既婚女性に夫と別居中でないかを尋ねるようにした。そのため、調査の初期段階で「既婚」と答えた女性の中に、夫と別居中の人が含まれる可能性が高い。

16）ベンガル語での回答は、”nijer paay daranor jonno” で、「自分の足で立つため」、という意味である。

17）ベンガル語の回答は、”bilding toirir jonno” で、泥やトタン、竹、ジュートの茎などでできた貧しい家でなく、レンガやコンクリートでできたビル（しっかりした家）を建てるため、ということである。

18）バングラデシュの結婚は親同士の話し合いで子供の結婚相手を決める arranged marriage が多く、また女性側から男性側に多額の持参金を出すのが一般的である。 女性の年齢が高かったり肌の色が黒いなど条件が悪いと高額の持参金を出さないと相手を見つけることが難しい。今回の調査中でも、自分の結婚資金を得るため

に出稼ぎに行くという 26 歳の未婚の研修生は、「よい夫を見つけるためには沢山お金が必要だ」、と回答している。

19）コミラ県農村部における筆者の調査では（2017 年）、中東に男性が出稼ぎに行くには最低でも 30 万タカ（およそ 40 万円）必要だといわれている。貧しい世帯の 2 年分の生活費に相当する額で、土地などの資産がないと調達は難しい。

20）須田（2019）は、バングラデシュ農村の中学生を対象としたアンケート調査で、将来社会で働きたいという女子学生が多いが、ガーメント工場で働きたいという人はいないことを報告している。

参考文献

Arifur Rahman Rabbi（2019）. “109 female Bangladeshi workers return from Saudi Arabia”, *Bangladeshi Tribune*. August 27, 2019.（https://www.dhakatribune.com/bangladesh/dhaka/2019/08/27/109-female-bangladeshi-workers-return-from-saudi-arabia）

BRAC（2012）. *Migration Programme*. Dhaka.（パンフレット）

BMET（no date a.）. *Overseas Employment of Female Workers*（*1991 to 2019*）.（http://www.old.bmet.gov.bd/BMET/stattisticalDataAction）

BMET（no date b.）. *District Wise Overseas Employment*（*Male & Female*）*from 2005 - 2018*.（http://www.old.bmet.gov.bd/BMET/stattisticalDataAction）

Comilla TTC（2016）. *Bidesh Gomnecchu Grihokormider Hauz Kiping Trening Manuyal*（外国に行く家事使用人のためのハウスキーピング・マニュアル）、Karigori Proshikkon Kendro（TTC）, Kotbari, Comilla.

Nazrul Islam et.al（2017）. “Working Conditions and Lives of Female Readymade Garment Workers in Bangladesh”. *Resarch Gate*.（https://www.researchgate.net/publication/313839491）

Siddiqui, Tasneem（2006）, *Bangladeshi Domestic Helpers in Delhi: A Study of Securitization of Migration in India and Its Impact on Bangladeshi Irregular Female Migrant Workers*. Working Paper Series No.8. RMMRU, Dhaka.

Sri Lanka Bureau of Foreign Employment（2017）. *Annual Statistical Report of Foreign Employment 2017*.

Sultana, Humera and Ambreen Fatima（2017）, Factors Influencing Migration of Female Workers: A Case of Bangladesh.” *IZA Journal of Development and Migration*. 7:4, Springer Open.

石井正子（2014）.「フィリピン家事労働者に対する保護への取り組み」細田尚美編著、『湾岸アラブ諸国の移民労働者－「多外国人国家」の出現と生活実態－』明石書店、pp. 122-146。

押川文子、南出和余編著（2016）.『「学校化」に向かう南アジア』昭和堂。

日下部尚徳（2018）.『わたし 8 歳、職業、家事使用人。』合同出版。

ガードナー、K、田中典子訳（2002）.『河辺の詩―バングラデシュ農村の女性と暮らし』風響社。

須田敏彦（2019）.「バングラデシュ農村における若者の近未来の自画像－中学生を対象とした進路希望アンケート調査の分析－」『東洋研究』第 212 号、大東文化大学東洋研究所、pp. 1-32。

須田敏彦（2013）.「スリランカの海外出稼ぎ労働者－金融の役割に注目して－」『大東文化大学紀要』第 51 号＜社会科学＞、pp. 91-107。

辻上奈美江（2014）.「サウディアラビアにおける家事労働者の流入と「伝統」の再生」細田尚美編著、『湾岸アラブ諸国の移民労働者－「多外国人国家」の出現と生活実態－』明石書店、pp. 101-115。

長田華子（2014）.『バングラデシュの工業化とジェンダー：日系縫製企業の国際移転』お茶の水書房。

西川麦子（2001）.『バングラデシュ―生存と関係のフィールドワーク』平凡社。

吉野磬子（2013）.『屋敷地と在地の知―バングラデシュ農村の暮らしと女性』京都大学学術出版会。

（2019 年 9 月 26 日受理）